

ユネスコ／ICA 世界の記憶アンケート調査国内分とりまとめの報告

小川 千代子

ユネスコは、昨年以來「世界の記憶」と題し、ICAおよびIFLA世界図書館連盟との協力で、20世紀初頭から今日までに各国の記憶遺産がどのような災・天災の被害にあったのかのアンケート調査を行っている。ICAが行った調査では、全史料協機関会員が日本の調査対象となった。(IFLAの調査は、日本では国立国会図書館と日本図書館協会が協力してこれに対応した模様である。)

調査は、1900-1994年までの95年間に被った様々な原因による資料被害を数量で把握しようとするものであった。そのため、設問は「100パーセント破壊された資料が書架延長にして何メートル分あったのか」という調子で数値記入を求める形式を取っていた。

調査用紙は全史料協機関会員全員あてに1月上旬に発送した。全部で16頁にわたる調査用紙ではあったが、締切の1月20日を過ぎてもおお続々と返信が寄せられ、合計91機関からの回答を得ることができた。このうち設問のような災害による資料被害および対策について「該当なし」の回答は62通、なんらかの被害または対策についてのコメントのある回答は29通であった。

ユネスコ／ICAでは英語またはフランス語の回答を求めていた。日本語の回答は翻訳作業が必要であった。そこで作業時間の短縮を図るため、該当なしの62通は、機関名のみを報告にとどめ、コメントのあった29通は全体を翻訳し

て、調査担当者に返送した。

29通の回答中、具体的な被害資料の数値を提示したものは見当たらなかった。具体的な被害の原因となった災害では、第2次世界大戦を挙げたものが多かった。とりわけ、広島、沖縄はじめ、いくつもの機関から誰でもが知っている戦争被害(武力紛争、空襲など)の結果として資料が破壊されたことが報告された。また、数はさほど多くないものの、戦後の混乱期に「命令により」廃棄された資料があったことも、未確認情報として報告されていた。

調査結果の全体から見て、日本では災害による資料の被害の数量的把握はほとんど行われていない。災害の程度を百分率で観察するという設問自体がいささか馴染みの薄いものであったと考えられる。被害を受けた資料のなかから、篤志の人が自宅に持ち帰ったために今日残されているものがあったという事例が非公式情報として報告された。

こうしてみると、災害あるいは意思により破壊された資料がどれ程あったのか、なにが破壊されたのかという情報を記録し保存しようという考え方は、わが国のこの百年間にはほとんど見られない。少なくとも、意図的に記録を作成し保存するというよりは、たまたま残っているものを大事に保管することのほうに関心が向いているように感じられた。

(国際資料研究所)